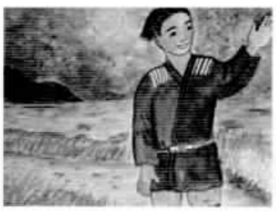
又左衛門の話を聞いていたみんなは、そんな立派な先生がおられることに驚きました。そして、その教えを勉強し、守っていることに、心を打たれました。



⑫**又**「皆さんとおいしいお酒をいただきました。ごちそうさまでした。それではこの辺で帰らせてもらいます。」

馬方又左衛門は、にこにこと笑顔で宿屋の人達に手を振りながら、暗くなった道を帰っていきました。

この真心あふれる馬方又左衛門の話は、後に人から人へと伝えられ、四百年たった今も、川原市に、その立派な行いを褒め称えた記念碑が建っています。

（おしまい）

※※※※※※※※※※※※※※※

紙芝居「馬方又左衛門」の中で、左記のように文献によって伝えられているお話が異なる部分があります。ご理解いただき、ご使用ください。

②の文章

「原文」又左衛門が川原市から榎（現大津市和邇）の宿まで、飛脚を送った。

「別説」川原市から小松（現大津市北小松）の宿まで、飛脚を送った。

④の文章

「原文」又左衛門が榎の宿まで直行して大金を届けた。

「別説」小松の宿を経由して榎の宿まで大金を届けた。

解説について

紙芝居は正直な馬方又左衛門が、仕事の疲れもいとわず加賀の飛脚が忘れた大金（二百両）を川原市（高島市新旭町）から七里も離れた榎（現大津市和迩）の宿まで届けたというお話です。

このお話では又左衛門の行動を称えて、藤樹先生の教えが広く地域の人たちにまで浸透していたことを知っていただくことを主眼としています。

寄稿　会員のひろば

藤樹さんとのご縁

足立　清勝

平成十七年、市制高島市になった年に新たに高島藤樹会が発足、今年は市制十周年と共に高島藤樹会も十年の記念すべき年を迎えました。

その間、藤樹先生については全くの無知であった私も入会のお誘いを受け、いろいろな場面で関わりを持たせて頂いてきました。中でも大きな節目である平成二十年の生誕四百年祭では半年間に及ぶ多彩な記念事業が実施され、東京でのイベント開催、市民劇「藤の樹と風と―中江藤樹物語―」の上演、子ども向けには教材委員会の改訂版藤樹かるたの制作が特に印象強くその場に立ち会えたことは大きな喜びとなりました。

また、発足以来続いている藤樹先生のエピソードを描いた手づくり紙芝居もこの春で十八作を数えました。現在、会報やホームページに順次掲載されており、今まで市内の保・幼・小・中学校や図書館など一部の人にのみ利用されてきましたが、今後は会員や市民をはじめ広く多くの方々にも見て知っていただけます。

藤樹先生が四百年の長きに亘り、地元上小川の人たちの直向なご奉仕の心と先生を慕う多くの市民の方々の熱い思いの中で敬愛され長い歴史を刻んできたことに心から敬服いたしております。

私の好きな論語の一節「六十にして耳従い、七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず」の言葉を噛み締めて、藤樹先生とのご縁を大切に「五事を正す」を胸に秘め、残りの人生を有意義に且つ、少しでも世の中のお役に立つことができればと感じている今日この頃です。

※※※※※※※※※※※※※※※

藤樹書院にて日々反省

林　清和

縁あって、藤樹書院の説明をさせていただくことになり、ほぼ一年が過ぎようとしています。年間行事を一通り経験することができ、ようやく書院で行っていることを自分の言葉で説明できるようになりました。

書院に係わるまでの私の生活は、藤樹先生に関することが生活の一部になるとは全く予想できませんでした。そんな私でしたので、書院の案内や藤樹先生の教えなどがうまく説明できるだろうかと、とても不安でした。しかし、その不安感や自信のなさを表に出すことを恥と考え、背伸びをしながら一年を過ごしてきたと反省しているとき、この原稿依頼を受けました。

今思えば、お参りいただいた方に多くのことを知っていただきたいという思いよりも、「いかにも私は知っていますよ」と、自分に恥をかきたくないという不純な背伸びをしていたと思っています。

しかし、説明者がこんな気持ちで良いのか、と自問するたびに猛烈に反省させられました。説明に恥をかきたくないという思いから、せっかく書院に係わっているのだから藤樹先生の生き方から学ぼうという思いに、知らないうちに変わっていたことに気づきました。

この縁を機会に「五事を正す」ことが、当たり前のように自然にできるよう、これからの時間を日々「自反慎独」しながら「ようこそお参りくださいまして、ありがとうございます」と、心から接待できるような自分になりたいと思っています。